



夕日の海へ山田海岸から刺網の舟が出航してゆく。
長年の感で季節に応じ潮の流れに応じて網を張る。



海岸のあちこちに群生するハマナスは今は盛りである。
海浜植物への関心は高く観光資源としての活用も期待される。



ハマダイコンの群生はもう花を終わって種実を結んでいる。
ハマエンドウもその季節を終わって今はハマヒルガオがピンク色の花を競う。

還暦・古希・喜寿 ふるさとに集う



月刊 第 599 号

梅雨に入りましたがあまり雨は降りません。カラ梅雨と言う感じで、ジメジメした天気は好ましくないものの、降る時に降らないと後が恐いし、畑は雨を欲しがっているのだが仲々丁度よい具合にと言う訳にはゆかないようです。
五月の連休以来一ヶ月半か弱い葉先を春の風に震るわせていた早苗もすっかり成長してしっかりと根を張り初夏の光の中で

美しく緑を輝かせています。山々の緑も春先の変化に富んだむしろ不安定な迷彩的な色合いから落着いた濃い緑色となり雨に煙る時など山合いから樹々の呼吸が立ち昇るような感じさえします。
雨と風と光を求めて枝を張り葉先を抜けてゆく朴の木は大振りの花を咲かせ泰山木のクリーム色の重厚な花も負けじと高貴な香をはなっています。山ぼうしも可憐な花をちりばめて梅雨の季節には白い花が目立つようです。海では烏賊漁が最盛期に入り日没と共に集魚灯が輝き始めいよいよ夏へ向って季節は歩調を速めてゆくようだ。
蛍の話題もチラホラ、自然環境のパロメーター的存在となり

スロライイブの代表格と言ったところであろうか。今年には例年より気温が低く一週遅れにいたるところでであるがのんびりと蛍見物でもして兎角疲れ勝ちな心を癒してみても如何なものではありませんか。
「青葉のころ人恋しさまされ」とは清少納言の言葉ですが、六月のまさに青葉の季節の中で還暦、古希、喜寿の集いが次々と開催されました。皮切は巳と午の会昭和四・五年生れの喜寿の祝い、六月九日、十日には還暦の集い、団塊の世代二十一・二十二年生れの会が、そして十一日には戦争の世代十一・十二年生れの古希の会が申合せたように連続して開催された。やはり記念すべき集いはふるさとへ

自然と指向させるようで、それぞれ一泊をかねた集いで夜を徹して尽きぬ思い出話に花が咲いたようです。
さて愈々ふるさとだよりも終刊に近づきました。
三十周年、四十周年と纏めた合冊本が発刊されているので何とか同じ型でしめくりたいと計画、ようやく発刊の目途もたつたので今号でご案内させて頂く次第。原寸の大型本で経費の關係で紙装上製本としました。百冊位の申込を予定しての発刊です。又終刊記念のパーティーを九月十七日に開催します。この日は偶然にも故窪沢泰忍師の祥月命日に当たります。生前のふるさとだよりへの貢献を忍びながらふるさと談義、思い出話な



月見草も種まきをした成果がಾಗಿ広く群生しはじめて
いる。太宰治は富士山には月見草が似合うと言った。弥
彦山にだって似合うのだ。



盗掘で瀕死状態になったハマボウフウも心ある人達の努
力で復活。コロニーの成人式記念植樹の松の間に白い花
を咲かせていた。



今年の豪雪の雪解水で河口は連日滝のような激流となっ
ていたが、稚鮎の群は果敢に上流に向かって遡上する。
そんなDNAが働いているのだろう。

ど和やかな集いにしたいと思っ
ますので大勢の方からご出席頂
きたいと願っております。
コールエコーはまなすのメン
バーによる「ふるさとを思う」
歌を聴き又一緒に歌いましょ
う。誌友有志の出演による組踊
り佐渡おけさ他も開催日に向っ
て特訓中です。こちらは和泉流
師匠折田敬子(旧姓柳下)さん
に御指導を願っております。
最終号には皆様からの寄稿を
期待しておりますので七月二十
日メド切でどうぞ投稿して下さい。
六ページ立てで発行の予定です。
今原稿の採目を埋めながらふ
と美空ひばりの「川の流れのよ
うに」が頭をよぎりました。
ふるさとだよりの五十年も思
えば遙か遠くしかしいつもふる

合冊本を読む

さとうのぶひと

前に「ふるさとだより」の号
外が出ていたことを書きまし
た。十五周年記念会の様子が報
告された特集号です。この号外
の前後に三回に分けて掲載され
た「三千匹のボラ逃がす」とい
う記事を見つけた。見出し
からしていかにも面白そうで、
思わず目に留まってしまいまし
た。書いたのは、この「ふるさ
とだより」に度々寄稿された阿
部五郎さんという出雲崎の方で
ます。一七九号のあらすじ。
事件は大正十一年三月十一日

に起った。出雲崎の漁船が沖合
いを回遊する約三千のボラの大
群を発見した。出雲崎船は大挙
してこれを追った。山田にかか
ると山田の磯海衆が加勢し、出
雲崎船十数隻、山田船数隻でボ
ラを追った。
志戸橋、郷本、七ツ石、大和
田と追って、とうとう寺泊の築
港が見える水域まで来てしまっ
た。ここで獲らなければ寺泊の
領分内に入ってしまう。ここま
で追ってきたのに、寺泊の漁師
にみすみす横取りされるのも癪
だと、どの船も一斉に網を打ち
はじめた。
これを見つけた寺泊の漁船は
黙っていられない。領分を侵さ
れたものと抗議するうち、海の

上で両船団の大乱闘が始まっ
た。そうこうするうち、ボラの
大群は逃げ去ってしまった。
次に一八〇号のあらすじ。
組み付いたまま海へ落ちる
者、血まみれの形相で相手の船
に乗り込んで立ち回りする者。
このままに捨ておいたら、死人、
怪我人が出るものと思われた
時、火急の知らせを受けた警察
が海の上に乗り返ってきた。
寺泊分署に集められた一同
は、署内に入ってからも掴み合
いをしながら大声でお互い理屈
を並べ争っていたが、やがて双
方から一名づつの代表者が選ば
れ、意見が聞かれることになっ
た。
寺泊漁業者代表——寺泊で

は、ボラは夜中に漁獲すること
が昔からの決めになっていた。
また天下領の時代から、よその
漁業者が寺泊地元で漁をするこ
とは禁じられている。
出雲崎漁業者代表——明治年
代に入り、下は越前浜、五ヶ浜、
間瀬、寺泊、出雲崎、上は石地、
椎谷、宮川沖まで八組合が組織
され、延縄その他の入会い漁業
が認められている。——双方と
もに譲らず弁じ合った。
最後に一八二号のあらすじ。
ボラ騒動では血の雨を降らせ
たが、寺泊と出雲崎の漁業者は
昔から切っても切れない間柄だ
った。嵐に遭うと、出雲崎船は
必ず寺泊の浜に船を着けた。寺
泊の人は骨肉も及ばぬくらい彼



かつて飛砂で悩まされた磯町白岩の海岸も砂防林に守られ、かつての砂山も草に覆れ、宝くじの記念桜植栽地。いつか桜の名所となろう。



砂丘の中に遊園地があり、展望台があり、四阿がある。ウォーキングコースとして絶好と思われるが、この時代一寸危険度も高いかな。



法崎から本山の集落を向うに国上山、弥彦山を望む視点。梅雨の季節はここからの構図が私としてはおすすめのです。

合冊本発行

(定価 四千円)
紙装・平背上製本 五二〇頁

終刊記念ふるさとを語ろう
記念パーティー

九月十七日(日)
午後三時開宴

会場 ホテル住吉屋
会費 五千円

ふるさとを歌う
コールエコーはまなす
組踊り佐渡おけさ他
誌友有志

◇申込みは同封の返信ハガキで。

らの面倒をよく見た。風ぐまで幾日も宿舎を提供し、宿銭をとらなかつた。こうして漁業者の間には深い縁で結ばれ、長いつきあいが続いている家がいくつもある。

この事件の資料は大正年間に発行された「出雲崎月報」からのものである。

——漁業権の水域をめぐる争いでした。この事件がどのようておりませんが、多分仲直り、円満解決だったのでしよう。双方の言い分を読むと、江戸時代からの「お墨付き」を楯にとる寺泊漁業者に対し、出雲崎の漁業者は近代的合理性を身につけていたように思われます。とも

あれ「漁夫の利」ではなく、結果として「漁夫の損」を招いた訳ですから、争っていいことはありません。

合冊本をめくりながら次に目に留まったのは、二七九号「密偵野積に死す」の見出しでした。「維新前後ものがたり」の副題があり、記者名がないところをみると、編集長の故窪沢泰忍さんの記事と集まれます。

——戊辰戦争のさなか、北上する官軍は柏崎に本陣を進め、長岡藩に恭順を迫っていた。出雲崎、寺泊、与板は戦場と化し、幕軍、官軍入り乱れて一進一退の膠着状態。やがて熾烈きわまる北越戦争に発展しようとしていた時のことである。官軍の密

偵が弥彦に潜伏し、密かに情報収集していることが発覚した。弥彦一帯を差配していたのは、観音寺久左衛門といはくち打ちの親分で、反官軍派の先鋒である。与板藩から「用人格」という役職を与えられていた。このころになると、もはや武士もはくち打ちもなかつたのである。密偵はこの観音寺久左衛門の手のものにかかり、「ご神域」である弥彦を避けて野積浜で斬られた。

密偵は越前鯖江藩士。名は谷川滝藏。享年二十八歳。

——合冊本をめくっていると、思いがけない記事に突き当たることがあります。今や寺泊風俗史の貴重な証人と言っているでしょう。

誌代御後援(敬称略・順不同)

- | | | | |
|------|-----|-----|------|
| 函館市 | 奥田 | 梯子 | 金三千円 |
| 東京都 | 石井 | 定男 | 金五千円 |
| 東京市 | 北村 | 良子 | 金三千円 |
| 武蔵野市 | 宮前 | 里子 | 金三千円 |
| 坂戸市 | 山本 | ユリ | 金三千円 |
| 横浜市 | 指田 | 誠一 | 金一万円 |
| 日野市 | 清水 | 昭 | 金一万円 |
| 三島市 | 北沢 | 順治 | 金三千円 |
| 静岡市 | 坂本 | 忠世 | 金五千円 |
| 新潟市 | 佐野 | キク | 金五千円 |
| 寺泊 | 平井 | 英次郎 | 金三千円 |
| 川島 | 鳥田 | 紀男 | 金三千円 |
| 川島 | 三重子 | | 金三千円 |
| 渡辺 | 牛乳店 | | 金三千円 |
| 由井 | 豊一 | | 金三千円 |
| 倉井 | 政博 | | 金三千円 |
| 桑原 | 亮平 | | 金三千円 |

小波会六月句会詠草

兼題 出水・竹落葉他当季

弦月や

出水に跳ねる魚の影

中村 流瓢

昂ぶりの

出水呑み込む日本海

加勢 白汀

遠山の

影をゆらして出水かな

小島 冬扇

野良人に

サイレンの音出水川

広瀬 洋子

真夜中に

出水見守る衆の中

竹内 霍山



今年の観音講は幸いよい天気廻りに恵まれた。夜店や境内に流れる読経と鐘の音。なつかしい時の流れが感じられる初夏の行事。

池の面に

葉舟浮かべる竹落葉

外山 きよし

空庵に

風と舞込む竹落葉

能登 頑牛

竹落葉

関かに積もる阿弥陀堂

外山 海子

しばらくは

留守というなり竹落葉

大越 碧水子

荒梅雨の

滝となる道五合庵

内藤 蓮子

植え田水

弥彦の峰の震動く

江原 汀子



下水道が整備されたが家並のすき間が狭いこの町の宿命で、どこの家庭も頭を抱えている。お寺も又別の意味で難問題なのです。

近道は

細き山道蛇苺

水沢 蕉子

若緑

朝毎眺む安き日日

小島 温石

あとがき

長岡市になって初めての夏が巡って参ります。

観光立町をメインの旗印に関係業者と行政が力を合わせて取り組んできた港まつりサマーフェスティバルがどうなるのかが

地域住民の関心事であることは当然で、七月五日には海開き海難供養が開催されます。

又八月七日の花火大会では海上フェニックス打上げと言うこ



浜が賑わいはじめています。休日は勿論のことですが、平日でも他所に比べて客の入込みは好調、有難いことです。

とで着々と準備が進められているようです。隣り燕市では吉田分水等個々で上げていたものをひと纏めにして分水で開催としようとして随分大きな規模に発展するようです。長岡市は市制百年で長岡の花火に力が入ることでしようから行政からの支援はあまり期待できそうにありませんが、寺泊の花火は広い砂浜とすぐ目の前での打上げ、海上海空と迫力ではひけをとらない

人気が定着していることですから大いに期待したいところです。

何しろ夏は海の季節、寺泊の季節です。五月の連休では県下一の人の出の記録もあることですから合併初年の夏を勢いある形で

出発したいものです。

で出発したいものです。

私は六月の夕日の海をトビウオが飛ぶ場面を何度か見ています。それは実に美しく印象的なものでした。ホエールウォッチングは無理ですがこの季節には高速船・遊覧船できっとご覧になれますよ。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町

発行所 新 潟 県 寺 泊 町

郵便番号 九四〇一二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二九七五

編集番号 〇〇六二〇三二七四五

印刷所 吉野印刷株式会社